

十九世紀末の中国の維新運動と日本

菅 野 正 (訳)

十九世紀末の中国の戊戌維新運動は失敗に終わったとはいえ、それは、中国近代の民族覚醒、改革提唱や思想啓蒙等の面では、いずれも一定の歴史的役割を果たした。

最近何年来、中国の歴史家は、清末の維新運動の歴史について研究を深め、その性質、役割、さらには各種の人物や思想に対して幅広い検討を進め、それに関する史料や史実について、発掘や考証を深めてきた。とくにここ数年来、北京故宮博物院で、維新派指導者康有為の一連の新史料が次々に発見され、それには、すでに失なわれたと思われていた康有為の光緒帝に進呈した『日本変政考』、『波蘭分滅記』、『列国政要比較表』等の原本や、さらに康有為の上奏した『傑士上書彙録』の内府抄本が含まれ、我々に、彼の变法思想について、一歩進めた認識をもたしめることができるようになった。以下で、私は、康有為を筆頭とする中国の維新派が、日本の变法維新を模倣せんと主張した思想に重点をおいて述べたいと思う。

—

1868年の明治維新以来、とくに1874年の日本の台湾への出兵侵略ののち、日本の抬頭はすでに中国人の注意をひき始めた。ある人は、日本の新政の得失について議論し、さらにみずから日本に赴いて実地に考察した人もあった。改良思想を有するこれらの有識者、例えば黄遵憲、王韜らは、すでに日本の維新の成功をたたえると同時に、西洋と日本より学び、中国において变法改革を実行せんとする主張をまず提唱した。しかし、当時の多くの中国の士大夫の心の中には、日本に対してなお蔑視的なものがあった。依然として、日本を「叢爾たる(ちっほけな)三島」よりなる「東夷の小国」とみなし、日本の抬頭は「夜郎

自大(身のほど知らずの尊大)」にすぎないと考える人がいた。さらには、なお封建守旧の目でもって、明治維新は「風を移し俗を易ることはなほ荒唐」と嘲笑さえする人もいた。

1894～1895年の中日甲午戦争(日清戦争)の結果、巨大で腐敗していた清朝帝国はついに新興の日本に一挙に撃破された。清朝政府が十数年間苦心経営してきた北洋海軍は全滅し、最後には、領土割譲、賠償金支払いを含む『馬関条約(下関条約)』の締結を迫られた。

中国の多くの愛国的な知識人は、『馬関条約』を大なる恥辱とみなし、ひどく悲しみ心を痛めた。1895年5月2日、康有為は、当時科挙の試験のため北京にいた一千余人の各省の挙人を糾合して、光緒帝に上書し、講和拒否、変法の主張を提起した。これが即ち、中国近代史上有名な「公車上書」であり、維新思想がすでに一つの政治運動に発展し始めたことを示すものであった。康有為は上書の中で、「この創大きく痛み深き禍をへて、必ずまさに臥薪嘗胆の謀りごとをなすべし」²と指摘している。日清戦争の教訓を総括するために、日本は何故、中国を打破することができたかを、まず問うてみなければならぬ。

康有為らの維新派は、日本の勝利の原因を、すべて明治維新の成功に帰している。彼は公車上書の中で、「日本は一小島夷のみ、よく旧法を變じ、すなわちよく我が琉球を滅し、我が大国を侵す。前車の轍、もって鑒となすべし」³と認めている。梁啓超も「日本幕府の専政、諸藩の力征(征服)、露、独、米の大創を受く、国ほとんど国たらず。明治維新より弦を改め更張し(面目一新し)、三十年ならずして我が琉球を奪い、我が台湾を割くなり」⁴といている。彼らは、日本が維新によって弱より強に変じた経験は、今日、各国が激烈な競争をしている世界にあっては、中国はただ変法維新してのみ、救亡と存立を図り得ることを証明した、と指摘している。このため中国は、自分の過去の学生、昨日の敵であった日本から学ばねばならない。そこで、康有為は『日本変政考』の中で、はっきりと「強敵を以て師資となすを妨げず」というスローガンを提唱した。

日本の明治維新は西方から学ぶことに成功して、富国強兵を実現した。そこで中国の維新派は、日本をもって教師とすることは、西洋から学び変法自強を図る近道であり、半分の努力で倍の効果があり、後から来た者が先になること

ができるとみなした。康有為はかつて「譬えば、室を作るに、欧米、型を絵き、日本、匠となり、而して我これに居す如し。譬えば、田を耕すに、欧米、種をもとめ、灌漑し、日本、艾を鋤き（除草し）、而して我食する如し。」⁵と多くの具体的な比喩をつくった。彼は、光緒帝に対し「泰西（欧米）講求三百年にして治り、日本、施行三十年にして強し、吾が中国の国土の大、人民の衆、変法三年すれば、もって自立すべし、この後蒸蒸日に上り、富強、万国に駕すべし」⁶と楽観的に言いふらすにさえ至った。

中国のブルジョワの維新派についていえば、何故直接欧米を模倣しないで、日本のモデルを採用しようとしたかについては、さらに奥深い原因があった。彼らは中国の富強を願い、中国で資本主義を発展させようとした。しかし、彼らはもともと脆弱で勢力なく、また下層大衆を動員することも願わず、さらに暴力革命をあえて挙行することもなく、ただ変法の希望を光緒帝自身の上に全面的に托するだけだった。彼らは、日本の人民大衆の斗争や戊辰戦争が、倒幕維新の際に果たした重要な役割を無視するという誤りを犯し、明治維新をただ明治天皇の「聖明新政」の結果であるとみなした。このため、彼らは、日本のように、天皇の命令により、上より下への変法改革を実行し、立憲君主制のブルジョワ国家を建設することは、まさに中国維新のもっとも理想的なモデルであると考えた。彼らは、フランスやアメリカのような多くの人民大衆が参加し、暴力手段をとったブルジョワ革命が、中国で発生することを恐れた。康有為はかつて光緒帝に対し、フランス大革命の恐怖を「流血、野にみち、死人、麻の如し」と大いに宣伝した。「普く大地、殺戮変乱の惨、いまだ近世革命の禍の如き酷なるものあらず」⁷とさえみなしている。だから、彼らにあっては、フランス、アメリカのブルジョワ革命のようなモデルは、決してまねるべきではなかった。

この外、維新派は、日本より学ぶことは多くの便利な点があると考えた。中日両国は一衣帯水であり、地理的にも近く、交通も便利で、風俗もよく似ており、文字は分りやすい。両国がもともとおかれている社会情勢や、西洋からうける衝撃や圧迫の状況もあまり差がなかった。しかも明治維新は時間的にも最近のことで、模倣しやすかった。康有為は、比較の上で「それ米、仏の民政、英、独の憲法の如きは、地、遠く、俗、異なり、変、久しく、迹、絶え」⁸模倣

するに難かしいといった。

清末の維新派は、日本から学ぶことを主張しただけでなく、日本、イギリスと連盟を結成して、共同でロシアの拡張に対抗することを鼓吹した。日清戦争後、まず、ロシアの主動で遼東を返還させるよう干渉したことにより、清朝政府内で親露の傾向が優勢を占め、外交、軍事の大権を掌握していた李鴻章はまさに親露派であった。しかし、ロシアは遼東を返還させる真の目的をすぐさま露呈し、1897年には旅順・大連に出兵して占領した。ロシアと日本、イギリスとの矛盾は日ましに尖鋭化した。この事態に対処するため、維新派はイギリス、日本と連合してロシアに抵抗するよう強く主張した。『傑士上書彙録』中に「旅大を脅割するため、密かに英日と連り、堅く拒み許す勿れを乞う折」と題する以前知られなかった康有為の上奏の抄本がある。康有為は、ひそかにイギリス、日本と連合する具体的な上、中、下の三策を提出し、イギリス、日本は中国の変法を支持し、中国がロシアに抵抗するを援助することができると幻想した。彼は言った、「ひそかに英、日と連り、赫怒（激怒）して戦うは上策なり。画押（調印）を許さず、その来攻をゆるし、徐ろに英、日の難を解くを待つは中策なり。万国に布告し、遍く地、通商するは下策なり。」⁹

維新派のこのような主張と、当時日本政府が、ロシアに対抗するために中国を籠絡せんとする態度とは大いに関係があった。日清戦争の後、日本の一部の官僚、知識人は、日中が提携して西洋とくにロシアの拡張に共同して対抗すべしと大いに鼓吹した。日本政府は清朝政府に対し、中国を助けて軍隊を訓練し、中国学生を援助して日本に留学させたい意向を表明した。1898年4月、日本駐上海総領事小田切万寿之助と維新派の人物の鄭漢応らは、上海亜細亜協会の設立を發起し、あい前後して入会した上海の官、商界の名士は百余人に達した。1898年初、日本参謀本部の神尾光臣大佐も湖北に行き、張之洞や維新派の人々にとりいった。維新志士の唐才常は神尾の遊説を聞いたあと、表明した。「今日の人すでに我と連盟するを願い、かつひそかに中、英と連りあい犄角する（両方から敵を挟撃する）を願い、かつ性命生死あい扶持するを願う。千載一遇、何の幸いか之にしらん。何の快なるか之にしらん」と。彼はなお「それ露と連れば則ち眉を燃しほぞをかむ（すぐに後悔する）、旦夕即ち異類とならん（すぐに亡びん）。日と連りもって英と連れば、則ち皮膚の癬もなお将来において補

救すべし』¹⁰とみていた。このような見方は当時の中国の維新派の中にあつては、一定の代表性を有していた。

二

日本の変法を模倣するため、維新派は日本の明治維新の理解と研究に努力した。駐日公使館の初代参事官であつた黄遵憲は、四十卷五十万字の『日本国志』を著し、日本の明治維新の各種の制度、施策を、真先に系統的に紹介し、また中国の実情に照しながら、評論を加えた。この書物は1887年に書きあげられたが、1895年に至つてやっと正式に出版された。これは中国人が日本を理解する主要な参考書となつた。1892年2月に、光緒帝は、直ちに『日本国志』を進呈し、御覧に供せしめるよう、特に大臣に命令していた。

康有為自身も、早くも1886年に、日本研究を始めていた。1896年、彼は一群の日本書籍を手に入れると、翌年には『日本書目志』を編纂した。さらに日本語にはほゞ通じている娘の康同薇の協力のもとに、日本歴史書の中から維新史迹を抜き出し、『日本変政記』を編纂した。

維新派は日本の維新志士の事迹の宣伝を非常に重視した。梁啓超は1897年に『記東俠』の一文を書き、日本の維新志士の献身的精神をたたえた。康同薇も『日本変法由遊俠義憤考』の一書を著した。湖南維新派の中心人物である唐才常も『日本安政以来大事略述』を書いて『湘南報』に連載し、湖南維新運動の推進に、一定の役割を果たした。

1898年(旧暦戊戌年)、中国の維新運動は高潮期に入った。1月24日、光緒帝は、康有為に接見の上、広く変法の意見を求めるよう、総理衙門大臣に命じた。すぐ後、彼にも意見を条陳し、著書を進呈するよう命じた。康有為はこの機会を得て、変法の綱領的な性質をもつ上奏、即ち「上清帝第六書」を直ちに上達した。「傑士上書彙録」にある原文によれば、彼は、中国の維新変法は「日本の明治の政をもって政法とす」べきこと、すなわち、日本の明治維新の青写真に照らして実施すべきことを、とくに強調した。3月29日、康有為は自身の編纂し著した『日本変政記』を進呈し、光緒帝は読んでのち非常に啓発されて、変法を決意し、そして慈禧太后(西太后)に対し、「我は亡国の君となる能はず、もし我に権を与えざれば、我はむしろ位を遜らん」¹¹と表明した。康有為

は、鉄は熱いうちに打てと、また御史楊深秀に代って奏稿を起草し、明治天皇のように「明かに諭旨を降し、著かに国是を定め、維新の意を宣布し、守旧の弊を痛斥」するよう光緒帝に要求した。年若い光緒帝も変法によって、親しく政権を掌握し、なす所あらんことを期望し、ついに1898年6月11日、「明定国是」の詔書を下し、変法の決意と方針を宣布して中国近代史上有名な「百日維新」を開始した。

6月16日、光緒帝は初めて親しく康有為を召見し、如何に変法するかを諮問した。康有為は、日本は変法三十年にして富強となった、中国は三年にして自立できるとし、「皇上の聖を以て自強を図れば、一たび掌を反す間にあるのみ（容易である）」といて光緒帝を励まし、そして「まず制度局を開いて法律を変ず」²るよう建議した。光緒帝は彼を総理衙門において執務させ、とくに「専折奏事（皇帝に直接上奏すること）」を許し、なお彼に編纂した各国変政考を速かに進呈するよう命じた。そこで康有為はたえず条陳を上り、また他人に代って奏稿を起草し、各種の変法建議を提出し、同時に、日夜、日本、フランス、イギリス、ドイツ等の国の変政考や『波蘭分滅記』『列国変法比較表』等の書を編纂して、次々に進呈して光緒帝の参考に供した。

三

康有為が光緒帝に進呈した『日本変政考』の書は、康有為の百日維新期間中での、最も分量が大きく、最も重要な著作で、彼が日本の変法維新思想を模倣して集大成した代表作でもある。この書物は長く宮中に秘蔵され、刊行されなかったため、多くの学者はみな、進呈本は戊戌政変後、失われたと思っていた。1980年、私は幸いにも、故宫博物院の職員の援助の下で、この珍本を見ることができ、その版本、筆写と進呈の経過や内容について、考証と分析を行った³。『日本変政考』は康有為が、百日維新開始後、光緒帝の旨意を奉じ、七月、八月の頃、一卷できるごとに次々と進呈したものである。故宫蔵本の正文十二巻は二函十二冊で、一冊ごとに「黄簽(黄色のふせん)」がはられ、「黄角(黄色の絹の角裂れ)」で包まれ、筆跡見事に整い、書き損じ塗りつぶした跡がなく、確かに康有為が光緒帝に進呈した正本である。のちにこの二函とは別に一卷の附録が発見された、即ち、第十三巻『日本変政表』である。

『日本変政考』は編年体の史書で、明治元年（1868年）より始り、明治23年（1890年）で終わっている。時間の順序通りに、日本の明治維新以降発生した大事件を分類記載している。重点は日本の明治政府が実行した各種の変法施策である。時に、日本の法令、条例、章程或いは演説の原文のあらましの抄訳さしている。康有為は書の前に序、書の後に跋を付し、さらに非常に多くの条文の後に、「臣有為謹んで按ず」の形式で、長短さまさまの按語を書き添えている。これらの按語は、一方で、日本政府の採った各種の改革施策の原因、方法、意義を分析し、その成果、利弊を論述し、他の一方では、中国の現実の情況に照らして、中国の変法維新の具体的な建議を提唱し、彼の变法主張を集中的に表現したものである。付録の『日本変政表』の中で、彼はさらに明治維新大事年表を列記し、明治元年より二十三年まで、年、月を逐って十一項目の記事に分類しており、調べるには大変便利である。

康有為は書の中で「変法の道は、必ず総綱あり、次第あるべし」と指摘している。また跋の中で、日本の明治維新改革の要点をまとめた。彼は考えている「その条理は多しといえども、その大端は、大いに群臣と誓って以て国是を定め、制度局を立てて以て憲法を議し、草茅を起擢して（民間人を抜擢して）以て顧問に備へ、尊をまげ貴を降して（身を低い地位におとして）以て下情に通じ、多く游学に派し以て新学に通じ、朔を改め服を易え以て人心を易える、の數点に外ならず、その余は自ら流水の如く行わしめる」と。實際上、これもまさに彼が光緒帝に実行を建議した中国変法の一つの総綱であった。

『日本変政考』の中で、康有為の叙述の最も詳細なのは、日本官制の改革に関するものであり、そして日本が対策所を開いてより、憲法を制定し、議会を設立するまでの一步一步の変遷過程を具体的に紹介した。注目に値するのは、彼は民選議院の設立を、「維新の始基」と考え、同時に、1890年の日本帝国議会の開幕を、日本変法の完全な成功のしるしと考えていたけれども、彼はまた、中国はなお直ちに議会を開設することは不可能だと考えていたことである、何となれば中国の風気ははまだ開けず、守旧の風が朝に満ちていたからであり、「日本もまた二十年に至りて初めて議院を開く、吾れ今国会を開くにおいて、なおその時に非らざるなり」であった。だから彼は、まず制度局を開き、維新派を重用して顧問に当て、光緒帝の「乾綱独断(天子の大権)」により「君権を

以て雷勵風行する（疾風迅雷的に嚴格に執行する）よう」主張した。

康有為は『日本變政考』を光緒帝に進呈し、光緒帝の変法の指針とするよう希望した。彼はこの書の最後で、「日本變政、ここに備わる。その変法の次第、条理の詳細、みなこの書にあり。その弱よりして強なる者、即ちここにあり」と得意げに宣明し、そして「我が朝の変法、ただ鑒を日本に採れば、一切すでに足る。」「その他英、独、仏、露の変法の書、聊か博く採覽するも、然れども中国の変法自強に切なるは、ことごとくこの書にあり」と声明している。彼は「我が皇上これを読み、採鑒すれば自強ここにあり、もしこれを棄てて採らざれば、またさらに自強の法なし」と断言するまでに至っている。

光緒帝は『日本變政考』を手にとると、果して至宝を得た如く、「これを読んで甚だ喜び」「一巻進ぜられるや、また次の巻を催し」「日に左右に置き、次第に選んでこれを行った。」¹⁵百日維新期間中、康有為やその他の維新派官員は、なお光緒帝に対し、日本変法を模倣した非常に多くの上奏を提出し、また日本の維新施策を手本にした少なからぬ上諭が下布された。たとえば、宗室、王公を選んで各国に遊歴させるよう詔したのは、明治維新後、岩倉などの大臣や貴族を派遣して海外に遊歴させて事に学んだものである。光緒帝はなお命令を下し、日本での博覧会の開催にならって、発明を奨励し、日本銀行制度を参考にして、中国通商銀行を設立し、日本財政改革の経験を取り入れ、国家予算を編制させた。また学生を選んでまず日本留学に赴かしめるよう各省に命じた。光緒帝はなお康有為の建議をうけいれ、日本が天皇の近衛軍、参謀本部をつくらしている政策にならば、皇帝自身が直接管轄する軍事力を創出する心づもりもした。1898年9月、日本の前首相伊藤博文が訪華すると、維新派は伊藤を留めて「客卿」にして新政の顧問にするよう口口に建議した。光緒帝自身も親しく接見し、親王の礼儀でもって遇し、日本の維新変法の経験について諮問した。

康有為を筆頭とする中国維新派と光緒帝は、このように熱心に日本から学び、そして明治維新を模倣すれば、中国変法の大事業はすぐに成就できると真面目に幻想していた、けれども、中国の戊戌維新と明治維新のおかれた時代、環境、国家内外の条件や新旧両派の勢力を比べると、すべて全く異なっていた。

日本の明治維新は下級武士を中核とし、反幕の強藩を基地として尊王攘夷を

スローガンとし、そして商人、市民、農民の支持を得て、強大な維新陣営を形成していた。戊辰戦争を通じて、ついに、崩解に瀕していた幕府旧政権を転覆し、維新派が執致する新政権を樹立し、一步一步各種の新政改革を実行した。一方、中国の戊戌維新の時にあっては、維新派はただブルジョワ的な傾向をもつひとにぎりの知識人だけで、また実際の権力をもたない一人の光緒帝にわずかに頼り、少数の皇帝派の官員と連合しても、兵力もなく、財力もなく、また基地もなく、しかも広大な人民大衆とも遊離していた。それと比べると、最高権力を掌握している慈禧太后を筆頭とし、中央でも地方でも軍事の実権を支配している大貴族、大官僚、さらには、変法により切実に利害とかかわってくるために維新に反対している大小官衙の官吏、旧軍人、旗人、八股士人等を含めて、強大な保守的陣営を形成していた。光緒帝の新政の詔令は、中央でも地方でも頑固派勢力の抵抗のもとで、多くは一枚の空文と化してしまった。1898年9月21日、即ち、光緒帝が伊藤博文を接見したその翌日、慈禧太后はついにクーデターを発動し、光緒帝は瀛台に幽閉され、譚嗣同ら六君子は殺害され、康有為、梁啓超はあわてて逃げ出し、日本に流亡するほかなかった。百日維新は、うどんげの花が現われてはすぐ消るように、わずか百三日間進行しただけで、すぐに失敗した。

さらに国際環境からみると、日本の明治維新の発生は十九世紀六十年代で、世界はまだ帝国主義の時代に入っておらず、西洋列強の東アジア侵略の主要な目標は中国で、その上中国の太平天国革命のようなアジア民族解放運動が牽制となって、日本の明治維新のために一つの比較的有利な国際環境を提供しており、しかも維新勢力は、イギリス、アメリカの支持を得ていた。一方、中国の戊戌維新は、十九世紀の末になってのことで、帝国主義はすでに中国を分割する狂潮をまきおこしており、列強は、中国が維新によって一つの独立した資本主義強国となることを決して望んではいなかった。当時、イギリスと日本は、ロシアに対抗するため、かつては中国の維新派に対して同情を示していただきもろうとしたけれども、ついに具体的な援助は与えなかった。日本の統治集団は、すでに維新によってロシアの在華勢力を抑圧し、中国の親日勢力をもちたて、進んで中国政府を控制しようとして希望していた。しかし、中国の新旧両派の勢力には大きな開きがあり、維新運動の成功の望みが大きくないのを見てとって、

慈禧太后や洋務派の気嫌をそこね、日本の在华利益に影響を与えるに至ることを願わなかった。伊藤博文は9月26日、彼の妻子に与えた手紙の中で、意外にも、維新派と光緒帝が「過激な改革を推行し」「万事日本に效法した」ため、慈禧太后のクーデター発動を引き起したと指責している¹⁶。これはまさに、熱心に日本から学ぼうとした中国の維新派に対する一つの諷刺である。

註

- 1 四明浮槎客『東洋神戸竹枝詞』
- 2 康有為『上清帝第三書』
- 3 康有為『上清帝第二書』
- 4 梁啓超『变法通議』
- 5 康有為『進呈日本明治変政考序』
- 6 『康南海自編年譜』
- 7 康有為『進呈法国革命記序』
- 8 康有為『上清帝第六書』
- 9 『傑士上書彙録』
- 10 唐才常『論中国宣与英日联盟』
- 11 『康南海自編年譜』
- 12 同 上
- 13 詳見 中国『歴史研究』1980年第3期
- 14 『日本変政考』跋
- 15 『康南海先生伝』上編14頁
- 16 『伊藤博文伝』下巻400頁

〔作者附記〕

本文はもと第32回国際東方学者会議に出席した時の論文稿で、『奈良史学』上に発表に際しては、一部改正と補充をおこなった。

奈良大学の招請をうけ、1987年5月30日、奈良大学史学会で、中日文化交流に関する講演をおこない、菅野正、明石岩雄、森田憲司ら諸先生の熱烈な接待をうけ、さらに奈良大学図書館所蔵の小野川秀美先生文庫を参観した。この機会を借り、奈良大学当局と先生各位、史学会の先生と学生各位に感謝の意を表し、並びにこの拙文につつしんでご批判、ご叱正を請う。